

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

やがて荒川^{あらかわ}が見えてきた。水面は、真夏の陽射し^{ひざ}を乱反射してギラギラと照り輝^{かがや}いている。

そういう場に自分が、それも夏輝^{なつき}のような連れとともに現実に居合わせているのだと考えると不思議な気持ちになる。

思えば、たまの配達を除けば外出らしい外出をまったくしない生活を長い間続けてきた。通勤のための日々の移動さえなく、まして旅行など、最後に行ったのがいつだったのかとつさには思い出せない。

今日はいわば、再出発の門出^{かどで}だ。われながらいロケーションを選んだものだ――。

そう思っていたのは、橋を渡^{わた}りきるまでだった。周囲の河川敷^{かせんしき}は、ゴルフの練習場になっていたり、公園として整備されていたりする。天気の良い休日だけあって、バーベキューに興じている家族連れも大勢いる。

①こんなに人目があると、少々具合が悪い。川に沿ってしばらく行ったり来たりして、ようやく比較的人目につかない恰好^{かっこう}のスポットを見つけた。ただ、どのみち河川敷に車は乗り入れられないようになっていて。

「まあ、そうだよな。ちよつと考えが甘^{あま}かったな……」

土手沿いの道に車を停^とめながら、光平は苦笑した。

「まあ台車も積んでるから、それに載^のせて運ぶなくもないけど」

「いいよ、そうしようよ。二人いるんだからできるよ」

夏輝^{なつき}に励^{はげ}まされるようにそう言われて、とりあえず荷台のシートをはがした。

現れたのは、一見するところまさにゴミとガラクタの山だ。押し入れの中に詰め込んであるよりも、こうして軽トラックの荷台に積み上げられている方が、いつそう廃棄物^{はいきぶつ}らしく見える。ただし、それなんの価値も認めないかどうかは、見る人間の気の持ちようひとつにかかっている。

――考えてみれば、美術作品なんて突きつめればすべてがそんなようなものではないだろうか。

美とは生きていくのに必須^{ひつす}の存在ではない。未開の種族から見れば、*マチスの傑作^{けつさく}だって子どもが描^{えが}いたいたずら描^がきにしか見えないだろう。

「うわ、すごい。こんなにあるんだ……」

十数年かけて制作しては蓄積^{ちくせき}してきた作品群。その全貌^{ぜんぼう}を初めて目にした夏輝は、あきれたように目を見開いている。

(1-3)

「まあ、かきばつてるのは主にこうした*インスタレーション系^{インスタレーション}なだけだね。こんなもん、ほんとによく取ってあったよな、今まで」

光平がそう言っている間にも、夏輝は手近なところにある*カンバスなどを引っくりかえしては、しげしげと見入っている。「鑑賞^{かんしょう}はいいから」とそれをやめさせ、台車を下ろして作品を積みかえはじめる。

「ほんとにいいの、全部捨てちゃって?――できのいいのをいくつかだけでも記念に取っておけばいいのに」

「こういうのは思いきりが大事なんだ。ひとつでも残しておいたら、その分だけ未練が残っちゃうそうでいやだから」

「あ、これってあれに似てる。ほら、あの映画、『アイ、ロボット』に出てくる――」

「だから鑑賞^{かんしょう}すんなってば」

笑いながらそう言っている作品のひとつを奪^{うば}い取り、それも台車の上に重ねる。

土手に設けられたコンクリート製の階段を上り下りするのは少し手間取ったものの、二度に分けてどうにか全作品を河川敷まで運ぶことはできた。

周囲を見渡すと、対岸に小さな子ども連れの若い夫婦^{ふうふ}がビニールシートを広げているのが目に留まるくらいで、これならさして人目は気にならない。あとはときどき、そばの舗装^{ほそう}された道をレジャー用のサイクルで駆け抜^ぬける人がちらほらという程度だ。

「じゃあ、さつそく……」

* 腕^{かひ}より始めよとばかり、光平はろくに見もしないで、手近なところにあつた二、三枚のカンバスを掴^{つか}み取り、無造作に川面^{かわも}に放^{ほう}り込んだ。カンバスはたがいにつかりあつて向きを変えながら、瞬^{またた}く間に下流の方へと流され、小さくなってゆく。

「え、そんな――なにかもつと、ひとつひとつに哀惜^{あいせき}の念を込めてお別れとかしなくてもいいの?」

当惑^{とうわく}した夏輝が、腕^{うで}にしがみついている。

「そんなことしたらキリがないじゃん。――ひよつとして、部屋を整理しようとするたびに、古い手紙とか読みふけっちゃって作業が進まないタイプ?」

「あ、ばれた? でも②光平^{ひかり}くんのその捨て方は、いくらなんでも思いきりがすぎるんじゃない?」

「未練ならもう飽^あきるほど味わいつくしたよ、この五、六年でね」

そうはいっても、いざ捨てるとなれば、もちろん、③体^{からだ}の一部を引きはがされるような心の痛みを感じ

(1-4)

じゃないわけではない。たとえ誰からも評価されなかったものとしても、生み出す側は本気だったのだ。どれひとつとして、制作したことを忘れた作品などない。自分の目で見た上でのできふきはあっても、それぞれに創意工夫があり、苦労があった。どの作品にも、当時の思い出が染みついている。—— 苦いものも含めて。

今になって、それを頭から否定するつもりはない。

十数年にわたってこうした作品を生み出しつづけてきたことを、無駄だったとは思わない。それは、自分の身の丈を知るためには必要なことだったのだ。自分の才能や器量のほどを知り、その事実を受け入れ、身の丈に合った生き方を迷いなく選び取るためには。

そういう意味では、これらの作品もそれぞれ立派に役割を果たしたのだ。だったらもう、解放してやるのがいい。今にも倒壊しそうな建物の押し入れなどで燻らせていないで、これまでの労をねぎらい、海へでもどこへでも自由に出ていかせればいい。そう思えば、^④手放すのも惜しくはない。

人のものを捨てるのはさすがにしのびないと夏輝が言うので、作品を積んであるところからひとつひとつ手渡す役をやってもらうことにした。だがそうすると、やはり夏輝は、いちいち手を止めて作品を眺めてしまう。

「あつ、これ——。私、これ見たことがある！ あれでしょ、文化祭のとき、パネルの裏に貼ってあったやつ！」

——「ラスコー洞窟の壁画」だ。長年の間に、重ねていた別の絵との間でこすれて、泥でつけた手形の部分が崩れ、その下に描かれていた飛べない鳥キーウィをいたずらに汚してしまっている。

それより、夏輝がその絵柄を覚えていたことに驚かされる。中学二年生のときに一瞬だけ、しかも批判的な視点で一瞥しただけのはずなのに。評価は別にして、少なくとも作品としてのインパクトだけは強烈だったということか。

「小坂井、あのときはなんかひどい言いぶりだったよな。いたずら描きにしか見えないとか、顧問の先生に許可は取ってるのかとか」

夏輝と呼んでほしいと言われているが、照れくさくてまだ切り替えられずにいる。

「私、そんなこと言った？ われながら超偉そうだね。でも今こうして見ると……いや、ごめん、今見ても同じ感想だな。悪いけど、これは私にはよくわからない」

そう言っただけながら夏輝が手渡してきた「ラスコー洞窟の壁画」も、分け隔てなく荒川の水が呑み込んでいく。

(1-5)

厄介なのは、*「YASU/KUN」などの大物だ。そのままドブと投げ込むのはさすがに憚られ、その場なるべく小さなパーツに分解してから投下していく。アクリル樹脂など浮いたまま流れていく部分があれば、金属などその場で水没していくパーツもある。

「ねえ、この行為って——なんらかの法に触れない？」

夏輝が遠慮がちに訊ねてくる。

「触れるだろうな」

笑ってそう返しながらも、作品——言い方を変えれば「廃棄物」を投棄する手は休めない。

こうしてすべてがあつてなく水に吞まれ、あるいは流されて、二度と手に入らないものと化していくのを眺めるのは、^⑤予想していたよりもはるかに爽快で、驚くほどすがすがしい。ひとつの作品が消えていくたびに、身も心もその分だけ軽くなっていく気がする。

きつと人は、こうして大人になっていくのだ——。

突然、そんな考えが頭に浮かんでくる。成人したのは十二年も前だが、その瞬間にすべてが切り替わるわけではない。成熟の過程というのは、実際にはその後もさまざまな経験を通じて少しずつ進んでいくものなのだろう。

大人になるとは、自分にとって何が無駄であるかを見極めて捨て去り、残すべきものを選び取っていく過程のことなのだ。まだ若くて、自分のなんたるかがわかっていなかった頃に、Aやみくもに伸ばしてしまつた枝葉。それを削ぎ落とし、真に必要な、自分に見合ったものだけが残るように刈り込んでいくことなのだ。

もちろんそこには、せつなさもある。それは、ありえたかもしれない自分を見限ることだからだ。果たせなかった望み。届かなかった願い。踏みつけにされ、傷つけられたプライド。恥辱や自己憐憫。失意と落胆。こんなはずではなかったのという寂然としない思い——。

ただ、それらを振り捨て、一度身軽になって大地を踏みしめなおすからこそ、^⑥残された幹は強靱で迷いのないものになるのだ。あとはそれを天に向けてまっすぐに伸ばし、より太くて頑丈な幹に育てていくだけだ。

「——で、今で終わり？」

そう言っただけながら夏輝の方を見ると、「だと思っけど」と言いながら首を巡らしている。

「あ、まだあつた」

* ラシャ紙に描いた何枚かの絵が、風で飛ばされて少し離れたところに散乱している。それを拾

(1-6)

い上げて重ねた夏輝が、いちばん上にあった絵をなぜか無言のままじつと見つめている。絵面は、向かい合っている夏輝の側に向けられているので、光平からは見えない。

「待つて。——待つて、これ……」

「——なんだよ」

「え、嘘。ちよつと待つて。——これつて、もしかして私？」

——忘れていた。作品群の中には、あの絵も交ざっていたのだ。中学卒業直前の時期、夏輝の顔立ちに潜む謎を解き明かそうとして何度も描きなおした、あの未完の肖像画も。

「ねえ、私だよ、これ、中学時代くらいの。どうしてこんなものか——」

「いいから。それも捨てるから」

慌てて奪いかえそうとしても、夏輝は驚くほど強い力でそれを拒み、どうせ捨てるならこの一枚だけは自分がもらうと言って聞かない。しまいいにはあきらめて、残りの数枚だけ受け取って川に流した。

空になった台車を押して車の方に戻る間も、夏輝は両手でその絵を捧げ持つて「ためつすがめつしたり、「ふうん」と一人でなにごとかを納得したりしている。なにかとてつもない弱みを握られてしまった気がする。

やがて光平の前に躍り出た夏輝は、体をくるとこちらに回転させてうしろ向きに歩きながら、顔を覗き込んできた。

「光平くんつてさ、もしかして——」

とても意地の悪そうな顔をしている。こんな表情の夏輝は、かつて見たことがない。

「もしかして、中学の頃から私のこと好きだったんじゃないの？」

「え、ちが——そんなわけ——」

言葉に詰まり、否定しようとするが、ろくな弁明を思いつかない。「いや、それを描いたのには理由があつて」などとしどろもどろに言いながら、内心では認めていた。——そう、たぶんそれが正解なのだ。

悔しいけれど、⑦小坂井夏輝は今回も正しい。

——平山瑞穂『遠すぎた輝き、今ここを照らす光』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(1-7)

(注) *1 マチス……フランスの画家。

*2 インスタレーション……現代芸術の表現方法の一つ。

*3 カンバス……油絵を描くのに使う布のこと。

*4 腕より始めよ……何かをする際には、まず発案者から率先して行うべきだという教え。

*5 「ラスコー洞窟の壁画」……中学校二年生の時に光平が描いた作品の名。

*6 「YASU/KUNI」……高校卒業後に光平が金属で創作した作品の名。

*7 憐憫……かわいそうに思うこと。

*8 ラシヤ紙……壁紙などに用いる紙のこと。

問一 線部A「やみくもに」、B「ためつすがめつ」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「やみくもに」

ア 朝の満員電車では、やみくもに乗らないと遅刻することになる。

イ 今年の夏も、やみくもに暑い日が続いていた。

ウ 試合に勝つためには、やみくもに練習すればよいというわけではない。

エ 友達に借りた本があまりに面白くて、やみくもになつて読んでしまった。

オ 思っていた結果が得られず、今までの努力がやみくもに終わってしまった。

B 「ためつすがめつ」

ア 夜空一面に輝く星を初めて見た彼は、ためつすがめつ見入っていた。

イ あまりにも難しい問題に出くわした彼は、ためつすがめつ悩んでいた。

ウ 待ち合わせた友達を見つけられずにいた彼は、ためつすがめつ探していた。

エ 今までに見たこともない昆虫を捕まえた彼は、ためつすがめつ観察していた。

オ 遠くで楽しそうに遊んでいる子供たちを見た彼は、ためつすがめつ眺めていた。

(1-8)

問二——線部①に「こんなに人目があると、少々具合が悪い」とありますが、それはどうしてだと思われませんか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好意を寄せている夏輝なつきと二人だけの休日を迎えることができたので、周囲の人々の目を気にせず
に過ごしたかったから。

イ これから作品を川に流すにあたって、その姿を他の人に目撃もくげきされてしまうと、とがめられそう
で落ち着かなかったから。

ウ 過去に制作した拙い作品が、事情をまったく知らない他の人々の目に触れてしまうことが気が

工 思い出が染みついてゐる作品を捨てる前に、他人の目を気にすることなく、心を尽くしてお別れをしたかったから。

オ　今日は自分にとって再出発と位置付けており、他の人の目を気にせずに、夏輝と二人きりでその門出を祝いたかつたから。

問三——線部②に「光平こうへいくんのその捨て方は、いくらなんでも思いきりがよすぎるんじゃない……」とありますが、このときの夏輝の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思い出が染みついた作品を惜しげもなく捨てていく光平に戸惑いをおぼえ、光平に対して漠然とした不信感を抱くようになってきている。

イ 自分を押し殺してまでも愛着のある作品を捨てていく光平の姿を見て、その悲しみを少しでもなぐさめてあげたいと思っている。

ウ　光平が実際に作品をあつさりと川に捨てる姿を目の当たり^まにして、何とかそれを思いとどまらせようと必死になっている。

工　こだわりをもつて描いたはずの作品を次々に捨てていく光平の姿を見て、せめてその際に伴うせつなさを共有したいと願っている。

才 何のためらいもなく思い入れのあるはずの作品を捨てていく光平に驚き、おどろどういう気持ちでいるのかと疑問を感じている。

問四——線部③に「体の一部を引きはがされるような心の痛み」とありますが、それはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作品を必死に生み出した際の思い出をすっかり忘れてしまうことのせつなさ。

イ 正面から作品の制作に取り組んできた過去の自分を捨て去ることによる喪失感^{そうしつ}。

ウ 自分が本気で創作した作品が誰^{だれ}からとも評価されなかったという現実の辛さ^{つら}。

工
十数年に渡る制作活動に終止符を打って新しい人生を歩んでいくことによる不安感

才 夏輝と暮らすために捨てなければならない大切に保管してきた作品への未練。

問五——線部④に「手放すのも惜しくはない」とありますが、光平がこのように思ったのはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問九 この文章の表現の特徴の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(このページは空白です。)

ア 本文中で用いられている「――(ダッシュ)」には、言い換えや過去の回想、登場人物の言葉にはならない感情など、多様な使い分けがなされている。

イ 文中では倒置法が繰り返し、巧みに用いられることによって、再出発の門出に際してもなお、揺れ動く光平の心の迷いを印象づける働きをしている。

ウ 本文は光平と夏輝の視点に交互に寄り添う形で語られており、二人が過去の思い出と向き合いながら次第に絆を深めていく様子が分かりやすくなっている。

エ 作品を「廃棄物」と言い換えている箇所があるが、それは作品の制作に打ち込んだ十数年間が、光平にとって決別したい過去であることを表している。

オ 休日の荒川沿いののどかな景色は、今日が光平にとって特別な日であることなどおかしなことに、等しく時間が流れていくものだとということを暗示している。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちはたとえば「悲しい」とか「寂しい」とかいう言葉で自分の気持ちを言い表します。しかし私たちの感情は固定したものではなく、さまざまな相が絡まりあい、大きな振幅をもちながら、Aやむことなく動いていくものです。それを私たちは「悲しい」とか「寂しい」という言葉で表すわけですが、そこでは私たちの感情の振幅が削り取られ、残ったものも固定化されてしまいます。それがそのまま私たちが実際に行っている経験であるとは言えません。

①問題はまさにそこにあります。つまり私たちは言葉以前に遡ることができませんが、しかし言葉がそのまま経験であるとは言えません。この切れ目のないもののあいだに存在する間隙が問題なのです。

私たちは私たちの経験を、たとえば「チューリップの花が咲いた」、あるいは「空が夕日で赤く染まった」というように、「主語＋述語」の形で言い表します。このように判断の形で表現しますと、どうしても、まず「チューリップの花」や「空」という「もの」があつて、それにかくかくしかじかの変化が起こった、という印象を与えます。

空が夕日で赤く染まるのを見るという経験は、私がそこに居あわせてはじめて成立するものです。単なる「もの」の変化・運動ではありません。空が赤く染まるということ、を私は、その場に居あわせて経験しているのです（木村敏『時間と自己』）。この経験は、私と「もの」とが一つになったところで生じていると言ってもよいでしょう。ところが、それを「空が赤く染まった」と表現しますと、出来事が「もの」のほうへ押しやられてしまいます。経験している私が排除され、ただ単に「もの」にかくかくしかじかの変化が生じたということが言い表されるだけになってしまいます。

言葉はもともと「もの」を言い表すのに適した構造をもっているととてもよいと思います。生起している「こと」から必要な部分だけを抜き出して、「もの」とその変化という②枠組みのなかにそれを押し込むことで言語表現が成立するのです。そうであれば、言い表されたものは当然、「こと」から離れてしまいます。経験と言葉とのあいだに隔たりが生じてしまいます。そのような意味で、言葉がそのまま経験であるとは言うことができません。

このことを踏まえた上で、いくつかのことを付け加えたいと思います。いまも言いましたように、言

(1-15)

葉は、私たちが直接経験している事柄を、一つの枠のなかに押し込めて表現します。そのために③言葉には必ず事柄の抽象化が伴うのです。しかし他方、言葉と私たちの経験、あるいは「こと」とのあいだには積極的な関係もまた存在します。

言葉には大きく言って、二つの働きがあります。一つは、ものをグループ分けする働き、カテゴリー化する働きです。たとえば、これはリンゴである、これはミカンである、これは青い、これは赤い、等々と「もの」を区別し、グループに分けていく働きです。ここでは「もの」だけが問題になっていません。グループ分けするときには、いま目の前にしているリンゴの独特の赤い色とか、それ独特の味、あるいは私がそれをどのように見ているかといったことは問題にされません。むしろそのグループに共通の性質で個々のものを一まとめにすることがその場合の唯一の関心事です。

他方、もう一つの働きとして、言葉は「こと」を喚起する力をもっています。もちろん言葉は、これまでも言いましたように、「こと」をそのものとして表現することはできません。言葉はバラの花の微妙な色合いや、リンゴの微妙な味を表現し尽くすことができません。しかし、たとえば「ローテローゼ」という品種の名前を挙げただけで、それを知っている人のなかに、その気品あふれる美しさをありありとイメージさせることができます。

「ローテローゼの赤」と言うとき、その「赤」は単に色の一つを言い表すだけの言葉ではありません。ローテローゼ独特の美しい陰影を伴った赤色を想起させます。それには、辞書に記された平均的な意味を超えた「ふくらみ」があるとと言ってもよいでしょう。言葉は、言葉による凝固作用によって変質をこうむる以前の生きたものを、その背後にもっているのです。

私たちの具体的な経験のなかで使われる言葉はすべて、背後にこの④「ふくらみ」をもっています。「赤い」という言葉は、そのときどきに見たものの独特の色合いをそのうちに含みながら語られます。もちろん私たちの日常生活のなかでは、その「ふくらみ」が主に主要な関心の対象になるわけではありません。それは多くの場合は「剰余」にすぎません。しかし、⑤美的な経験の現場では、むしろそのほうが主役となり、言葉のほうに「剰余」になります。「赤い」という言葉ではなく、言葉になる以前のバラの花の色合いが私たちの全関心を占めるのです。

その場合でも、言葉がまったく不要なわけではありません。簡潔な言葉でかまわないのですが、それによって「ふくらみ」へと目を向けるということが生じます。「ふくらみ」を共有する人のあいだでは、言葉は多くのことを語ります。たとえば、梅雨の時期、雨のなかで咲くあじさいの花には独特の美しさ

(1-16)

があります。それを知っている人のあいだでは、ごく簡単な表現でもその美しさを伝えることができるのです。他方、その「ふくらみ」を共有しない人、雨中のあじさいを見たことのない人にその美しさを言葉で伝える場合のことを考えてみますと、言葉はその力を一挙に喪失します。いくら言葉を尽くしても、その美しさを伝えることはできません。

経験と言葉のあいだには、先ほど述べましたように、超えがたい大きな間隙があります。しかし、私たちはその「ふくらみ」を手がかりにして、この間隙を飛び越えることができます。たとえば詩歌は、そのような試みの一つの典型であると言えるでしょう。

言葉は「こと」をいきいきと喚起する力をもっていると言いました。詩歌はその力を利用して成り立っています。

たとえば松尾芭蕉（一六四四—一九四）に「行春を近江の人とおしみける」という句があります。

一六九〇（元禄三）年に作られた句です。「奥の細道」の旅を終えた翌年ですが、芭蕉は春を琵琶湖畔で過ごしたようです。^{*4}『去来抄』にこの句について弟子の江左尚白が語った言葉が引かれています。「近江は丹波にも、行く春は行く歳にも、振るべし」というものです。つまり、この句の「近江」「春」は「丹波」「歳」と言いかえてもよいと言っているのですが、^⑥しかしやはり「近江の人」というのがこの句の眼目だと言えるでしょう。丹波の人ではなく、近江の人と行く春を惜しんだということが、この句を成り立たしめていると思います。

暖かい春の光、その光をきらきらと反射する琵琶湖のさざ波、暖められてもうろうと霞む湖面、その先にある比叡や比良の山並み、そのうららかな情景のなかだからこそ、いつそう行く春が惜しまれるのです。この句はただ単に、行く春をたまたま近江の人と惜しんだという事実を詠んだものではありせん。この句を読んだ人が、「近江の人」という言葉を軸にして、いま述べたような情景をありありと思ひ浮かべることを可能にするところに、この句の秀句たるゆえんがあると思います。

この句もそうですが、詩が用いる一つ一つの言葉は特別なものではありません。私たちが日常の会話で用いるものと同様、「もの」を言い表します。しかし、言葉の喚起機能を活かして、そこに「こと」の世界をくり広げていきます。とくに^⑦俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限らない「こと」を喚び起こし、無限に大きな「こと」の世界を切り開いていきます。逆に言えば、それを読む人は、一つ一つの言葉を読みながら、その先に無限の「こと」を見ます。言葉を踏み越えて無限の「こと」の世界に参入すると言ってもよいかもしれません。そこに詩の力があります。

(1-17)

—— 藤田正勝『哲学のヒント』による
(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 間隙……すきま。へだたり。

*2 ロータローゼ……バラの一品種。花弁の赤色が特徴的。

*3 近江……現在の滋賀県にあたる地域の古い呼び名。

*4 『去来抄』……芭蕉の弟子である向井去来が書いた、芭蕉の教えを伝える書。

*5 江左尚白……近江に在住した医師、俳人。芭蕉の弟子。「えさしうはく」とも言う。

*6 丹波……現在の京都府中部から兵庫県中部にかけての地域の古い呼び名。

問一 ~~~~~線部A「やむことなく」、B「かくかくしかじか」について、これらの言葉を本文中ではどのような意味で使っていますか。最もふさわしいものを、次のA、Bの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|------------|-----------------|
| A 「やむことなく」 | B 「かくかくしかじか」 |
| ア どうしようもなく | ア こちらのことやあちらのこと |
| イ いつまでも | イ 角張ったものや四角いもの |
| ウ だれでも | ウ どんなこともどんなものも |
| エ どこまでも | エ 形式的なものや実質的なもの |
| オ どんなものでも | オ あんなことやこんなこと |

(1-18)

問二——線部①に「問題はまさにそこにあります」とありますが、どこにどういう問題があるので
すか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉が感情の振幅に追いつかないで削り取らなければ固定できないところに、言葉で表現する
ことの難しさが隠されているという問題がある。

イ 感情は単独ではなく、さまざまに絡まったものであるところに、経験を一つの言葉で表現する
とつまらないものになってしまうという問題がある。

ウ 経験が言葉以前に遡って表現されることがないところに、経験したことのないことを言葉で
表現することはできないという問題がある。

エ 感情は複雑な要素を持ち、揺れ動くものであるところに、切れ目のないはずの言葉との間にす
きまができてしまうという問題がある。

オ 言葉がその言葉を使った人の経験をそのまま表しているわけではないところに、言葉では表せ
ないものが残る可能性が生じるという問題がある。

(1-19)

問三——線部②に「枠組みのなかにそれを押し込む」とありますが、それはどういうことですか。
その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何がどうしたという形で、経験したことのうち外面的に捉えられる部分だけを表現すること。

イ 何がどんなだという認識だけに頼って、経験と言葉との間の隔たりをなくしてゆくこと。

ウ 何がなんだという判断にとらわれて、自分が思考する世界の幅をせばめてしまうこと。

エ 何がどうなったかという結果だけを重視して、ものの変化をありきたりの表現で表すこと。

オ 何が生じたのかという事実から、自分が必要だと思ふことだけを抜き出して提示すること。

問四——線部③に「言葉には必ず事柄の抽象化が伴う」とありますが、それはどういうことで
すか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が経験したことを、ことわざや慣用句などみんなが使う言い回しで表現すれば、その経験
と言葉の間に積極的な関係を生じさせられるということ。

イ だれでも理解できるふつうの言葉を使えば、経験したことがないことでも実際に経験したかの
ように感じるができるということ。

ウ 言葉はものの変化という枠組みのなかに押し込まれているものであり、その変化を表現するに
はわかりやすい言い方をするのがよいということ。

エ 経験や出来事を言葉で言い表す時には、そのときに自分が感じたありのままではなく、ふつう
に使われる一般的な表現になるということ。

オ 言葉では経験を正しく表せないのは当然なのに、それを無理に表現しようとする個性が失わ
れ、面白味のないありふれた言い方になるということ。

(1-20)

問五——線部④に「ふくらみ」とありますが、ここで言う「ふくらみ」を感じさせるものの例とし
てふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冬の夜、蒸し上がったばかりのあつあつの肉まんを食べる時の最初の一口目。

イ 夕方、急ぎ足で家に帰る途中、どこからともなく漂ってくる焼き魚の匂い。

ウ 動物図鑑に載っている、パンダやシマウマのような動物の白黒まじりの模様。

エ 夜霧が深く立ちこめる中、遠くから響いてくる、港に停泊している船の汽笛。

オ クリスマスにもらった、ふわふわでもこもこな、大きな縫いぐるみの手触り。

問六 —— 線部⑤に「美的な経験の現場では、むしろそのほうが主役となり、言葉のほうが『剰余』になります」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文学作品などの芸術においては経験した「こと」が関心の的であって、表現された「もの」は「こと」に関心をもたせるための手段でしかないということ。

イ 印象に残るような体験においては経験した「こと」が独特なのであって、表現された「もの」は「こと」を一般化するための方策でしかないということ。

ウ 作品を創作する過程においては表現された「もの」は無意味であって、経験した「こと」が「もの」を押しやるということ。

エ 心を動かされるような体験においては経験した「こと」が大切なのであって、表現された「もの」は「こと」を伝えるものでしかないということ。

オ 俳句や短歌などの詩歌においては表現された「もの」は不要であって、経験した「こと」が「もの」を超えるところに眼目があるということ。

(1-21)

問七 —— 線部⑥に「しかしやはり『近江の人』というのがこの句の眼目だと言えるでしょう」とありますが、もし「この句」を、「江左尚白」が言うように「行く歳を丹波の人とおしみける」という表現に変えたとしたら、筆者はどのように評価すると思われますか。次のア～オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「近江の人」とは江左尚白のことを指していて芭蕉との関係が具体的にわかるのだが、「丹波の人」ではだれのことなのかわからず、ありきたりでつまらない句である。

イ 「丹波の人」という表現からは美しい情景や深い心情が喚起されることもなく、ただ単に知人と歳が変わるのを惜しんだという事実しか表していない、底の浅い句である。

ウ 「行く歳」は冬の季語であり、この句を詠んだ芭蕉は晩春の「近江」を経験しているのに、場所も季節も実際とは異なる、経験と表現とにへだたりのある真実味に欠ける句である。

エ 「丹波の人」という言い方が可能であるなら、日本中どここの地名でもこの句は成り立つことになり、芭蕉が「近江の人」と言った気持ちを考えようとしないう、心のこもっていない句である。

オ 「近江」なら芭蕉にとってはなじみ深い土地で、「おしむ」という言葉の背後にある情景を思いうかべることができるが、「丹波」ではそれができず、おもむきのない句である。

(1-22)

問八 —— 線部⑦に「俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限りない『こと』を喚び起こし、無限に大きな『こと』の世界を切り開いていきます」とありますが、次のX～Zの俳句の中から一つを選び、その俳句から読み取れる「『こと』の世界」を説明しなさい。なお、選んだ俳句を、解答欄にある「X・Y・Z」の記号に○を付けて示すこと。

X 夏草や 兵どもが夢のあと (松尾芭蕉)

Y 春の海 終日のたりのたりかな (与謝蕪村)

Z やれうつな 蠅が手を擦る 足を擦る (小林一茶)

